ふるさと

阪田貞雄

○

少年の私を、温かく柔らかに抱いてくれた故里「球磨」――それから、約四十年間の間をおいて、今、古稀の私を、温かく柔らかに抱いてくれている泉都「人吉」――生まれ故郷こそは、慈母のふところである。

○

雲雀の下のふるさとの言葉かな

人吉から歩きはじめて、柳瀬の「渡し」を渡り、高ン原の「並木道」をすぎて、（渡しも並木道も今はない）いよいよ、球磨盆地の春の中を歩いていた。

盆地を取りかこむ山々は、みな霞の中に眠り、道の両側の田圃には、れんげ草が咲き満ち、ところどころに麦が青く、菜の花が黄色に輝いていた。空には、ひっきりなしに雲雀がさえずっている。

道ばたの田圃のれんげ草の上で、春の陽を浴びながら、子供たちが相撲を取っている。その楽しそうな姿、元気な取り組み。そして、なつかしい「ふるさと」の言葉の渦巻き。私は、その言葉にふれて、あらためて深く「故郷」を感じた。故郷のすべては今、私の師範学校卒業を祝福し、私の帰郷をよろこび迎えてくれるような気がした。

その時詠んだのが、「雲雀の下のふるさとの言葉かな」であった。私の五十年前の教員生活は、ここに発足した。

○

ぬきん出て高き樹の梢まず見えて
霧よりさむる初夏の村

霧の深い球磨、その霧の球磨の上村での教員生活五年間――せっせと歌をつくりながら、焼酎を飲みながら、テニスを楽しみながらも、「球磨の教育は上村から」と、みんな打って一丸となって努力したあの頃――思えば若かった。はつらつとしていた。従って思い出も多い。

あの時の教え子たちが、今は、はや還暦を迎えようとしている。そして、時たま「先生を囲む会」を催してくれる。

○

昭和二十二年春浅く、三十年の教壇生活に別れを告げるための辞表を書いた。そして、辞表を提出するとすぐ、教員生活の出発点であった球磨を、上村を、こっそり訪ねた。

思うこと尽きず故郷の春浅く
春浅き故郷の山河目に熱し
目に熱き梅の古木に蕾あり

という一連の句は、その時の作である。

○

生まれ故郷こそは、まさに慈母のふところである。私は、恵まれて、今、その温かいふところの中で、生涯の仕事として来た教育のことにたずさわらせて貰っている。

日々の出勤または退庁のその折々、人吉橋の上から東を望み見て、市房・江代の美しい姿に接すると、きまって次の歌を口ずさむ。

父が岳いささか低き母が岳
ふるさとの山黄色くなりぬ

何処の風景を誰が詠んだのか知らないが、市房と江代を、「父が岳いささか低き母が岳」と見たてて口ずさむのである。少年時代の明け暮れに仰ぎ親しんだ市房・江代の肩を並べたやさしい姿。父が岳、母が岳と呼ぶと、おのずから童心にかえるのである。

虹の下仲よくならぶ山二つ
鳴きつれて鳥行く彼方山二つ

（人吉市教育委員会教育長）

"Q"

内田恵子

Qの瞬間――

微かに秒を刻む時計の音が、大火事のサイレンの様に頭上に響いて来る。彼の手は少し震え乍ら、しかし勢よく前へ押し出されます。それは丁度、暴走して来るダンプ・カーにマッタをかけようとする姿勢にも似ています。

NHKの仕事をお手伝するようになってから三年余り、毎日毎日、こんな厳しい表情の人々を見て来ました。私の仕事はプロデューサーのアシスタントの様なもので、字幕を出したり、レコードをかけたり、時にはアナウンスをしたりという半端な仕事内容です。しかし、そんな仕事の中にも、色々面白い発見があって思わず相好を崩す事があります。Qを出す時のプロデューサーの姿勢、これも面白い観察の対象です。

「Q（キュー）」――、皆さんもご存知の事と思いますが、手振りでスタジオの中のアナウンサーや出演者に、開始や終了、時には早くとか、ゆっくりとかの合図を送る事です。手の上げ下しで事が済む、極めて単純な動作ですが、Qは番組の呼吸とも云えるものですから、プロデューサーにとっては、緊張が極点に達する瞬間であり、無意識のうちに性格が強く表われる瞬間です。誰にでも愛想のよい愛嬌溢れるAプロデューサーのQは、玩具の兵隊の様な敬礼型。いつも自問自答をし乍ら番組を作っているBプロデューサーのQは、自分との格闘型です。指鉄砲型のCさんの場合は、それとは反対に大らかな楽しさがあります。西部劇を見すぎたのでしょうか――、服装にも表われるハイカラ趣味とマッチした楽しいQです。几帳面、生真面目なDアナウンサーのQは、電気仕掛けのロボット型。

この人と全く反対なのが、手足一致型のEさん。いつも忙しそうで、いざQとなると、手ばかりでなく足迄動いて了います。この人の頭の中をモダンアートの画家に描いて貰ったら、きっと面白い傑作が生まれるだろうと思います。ゼンマイや空かんが乱雑に散らばっていて、無数の時計がせっかちに時を知らせている風景――。プロデューサーの頭の中の風景としては、典型的な一つのタイプを示しているように思います。

ところで、或る日の事、「良き時代の最後のプロデューサーの演出だから見て来たらー」と云われて出かけた公開番組の時の事です。番組が終って今度はオーケストラの演奏を録音しようという時でした。時間が正しく九時を指した時、舞台の袖に立った良き時代の最後のプロデューサーと云われる彼は、やおら、両手で何物かを取り押えるような恰好をしました。すると、騒いでいた観衆は、吸いつけられる様に、彼を注視し、仁王様に頭を押えられた子供の様に黙ってしまいました。シーンとした瞬間、雷火の様に素速く飛んだQー、それを受けて流麗に流れるアナウンス。「皆さん今晩わ、今夜は熊本から……」アナウンスが終ると同時に、それ迄場内をしっかりと押えていた手が、さっと翻され、盛り上る力を必死でこらえるような形で次第に上げられて行くのに合わせて、拍手が大海の潮の様に迫ってきました。そしてピークに達した時、瞬時をおかず、指揮者に向って槍のQが飛んで行きました。全て観衆が、彼の振り下す些細な、しかし魔法のQにふりまわされているのです。一時間、三十分、或は十五分の番組の流れの中で、それぞれのQの瞬間は唯一度しかありません。その瞬間を嗅ぎ出す集中の中に、その人の生活態度の全てが、かかっているのではないでしょうか。

さて、最後に罪滅しに、私のQに名前を考えてみます。私は以前、八分間のお知らせの番組を作る機会がありましたが、気遅れがして、何度教えられてもQの手を出す事が出来ませんでした。八分間に六、七回のQをコックリで代える事にして了ったのです。居候は、お代りの三杯目には心配と遠慮を食べると云いますが、私のQは、この居候のコックリ型とでも云ったら良いでしょうか。手があるのかないのか、ボヤーッと判りにくい私のQは、オバケのQとも云えそうです。今更、Qの難しさを感じています。

ふるさとの或る意識

牛島盛光

戦後まもなくはじめた「スエムラ」の調査も社会・経済生活が一応安定した昭和三十二年には完了していた。いまその出版原稿の整理浄書作業にかかっているが、読みかえしながら一寸頭をかしげたり、独りうなづいたりしていて仲々仕事がはかどらない。一例を挙げると村民の社会意識をある時点でとらえ記録しておこうと思い世帯主、既婚婦人、末婚青年、中学生に対し夫々五三、五七、二九、一六、合計一五五項目に及ぶアンケートをとり、その回答を分類した表がある。そこで一五五の項目のうちから一つだけピックアップして紹介するのが次の質問である。「日本人はもう少し愛国心を持たねばならぬと言われますがどんな方法が一番いいでしょうか」

回答の項目	回答数（人）	%
郷土の歴史を明らかにし勉強する	三七	三五
紀元節復活	二二	二二
教育勅語のようなものを学校で教えろ	一三	一二
軍隊復活	二三	二二
憲法改正して天皇主権を強力にする	一一	一一
公共物の愛護	二二	二一
修身を学校で教える	二八	二六
計	一〇七	一〇〇

この表の回答項目は筆者が用意したものであるが結果として表われた数字には一寸驚いたのである。その第一は末婚青年一〇七人のうち約三分の一の者が郷土史の重要性を支持していることであろう。郷土の歴史を明らかにしたいという願望は郷土を愛する心をはぐくみ、さらには愛国心の素地を造成することになるわけで、この村民感情は極めて健康である。健康な与論といえば愛国心育成の方法として「公共物の愛護」を挙げている者が一一％あるのも注目に価するであろう。前者と合せるとほぼ五〇％に近い数字にある。

調査当時から数えて十一年の歳月が流れている。その間における社会、経済上の客観的変化もさることながら当時の末婚青年のほとんどは結婚していることだろう。そこに主体的に意見が変わることもあろう。そんなわけで今再び同じ質問を同一人にしたからといって前回同様の結果が出るとは保障されないが、美しき自然に育った人々の心の中にいつも変らず密着している意識は郷土愛の感情であるにちがいない。紀元節復活をはじめ教育勅語、修身、軍隊の復活、憲法改正等で愛国心を育成しようというのは何だか付焼刃的である。本筋としては自然発生的な郷土愛こそが真の愛国心に連なる道ではないかと思うのである。

アメリカの人類学者エムブリー博士が昭和十年から一年間調査した須恵村（球磨郡）は SUYE MURA 出版（初版昭和十四年）以来海外に名が知れている。博士滞在の昭和十年、終戦時の昭和二十年、第一次安定期の昭和三十～三十二年、そして現在というように大きく変容した結節的時期があった。これは須恵村だけのことではなかろう。また変容して行くふるさとの姿を見つめるにしても可視的現象の記録は比較的容易である。筆者がはじめに書いたように目に見えないものの記録も必要なのではなかろうか。前回の調査以降の変化をボッボッ調査しておかねばと思う昨今である。

（熊本商大助教授）